

# 時化と鮮魚介類の需要（6）

この文章を書いている折、七尾湾における「トリガイ」の漁獲が3年ぶりに再開され、当日夕方のニュースにて報道された。翌日の新聞にも「百三十七<sup>キ</sup>の水揚」があったことと、「漁業者は「活気が戻った」と声を弾ませた」と掲載されていた。残念ながら「高級食材として関東圏を中心に高値で取引される。」とも記載されていた。

（新聞記事ソース：北陸中日新聞 2018/4/19「石川」より）

ところが、石川県水産総合センターの日々更新されている「主要港の漁況日報」にも、JFいしかわーかなざわ総合市場ー市況情報ー「漁法別・日別の水揚状況」にも情報は上がってこない。どこに流通しているのかは不明。正直、少々値が張っても「旬」のものだから、なんとか手に入れたいと思っていたが「石川産」は諦めた。

県内「トリガイ」の取扱いは、その時点では「愛知産」が比較的多く、比較的安価に出回っていた。正確なデータは持ち合わせていないが、例えば、県内の「トリガイ」需要を満たすために、県産1単位を他地域（関東圏を中心に）に「転出」させている間に、他県産を10単位程「転入」させていたとすると・・・。そもそも「トリガイ」は数年毎に豊漁・不漁を繰返し、数年前は「韓国産」が豊漁（現時点では不良期）であった。

県内「トリガイ」の需要を満たす売上金額からの観点から考察すると、高単価×極少数<<低単価×大量（しかも他県・他国産）の数式が成立していると推論するのは、極自然であり、正確な数字を把握する術はないが、かなり高い確度であるように思える。

つまり、数%の金額を得るために、残りの90数%を取り損ねている。県内生産者のほんの一部の利益を確保するために、他県や他国の生産者にその利益の殆どを譲り渡している構図が成立することになる。他県（から・へ）の「転入出」は国内漁業者の「保護・育成」の観点から、仮に目をつぶったとしよう。しかし、例えば、ある品種を「1単位輸出する」背景に、「10単位輸入している」事実があったならば、これは「喜劇」ではなく「悲劇」そのものである。「ある品種」を「鮮魚介類全般」に視野を広げて、類推すると「甚大なる機会損失」を因らずも起こしているのではないか。

「トリガイ漁獲再開」のニュースが流れた数日後、今度は「養殖トリガイ」の出荷が始まった。今回は、各統計に数字は上がってきたが、店頭には並ばなかった。高単価に沸くのは漁業者の「性」理解できる。しかし、生産（漁業）者をリードすべき立場の漁連・行政各位が、この事実（甚大なる機会損失）に気付かず、生産（漁業）者同様に沸き立っていたとすれば、問題は深刻である。「部分最適の総和は全体最適とはならない」甚大なる機会損失を看過どころか、それを最善とするなら大きな間違いである。次回に続く。